

ヘンリ・ミラー著 大谷正義 訳

ロレンスの世界

— 熱烈な評価 —



株式
会社

北星堂書店

ヘンリ・ミラー 著

イーヴリン・J・ヒンズ
ジョーン・J・テュウニッセン 編注・序論

「
ロレンスの世界

熱烈な評価

大谷正義訳

株式会社

北星堂書店

著者略歴

一九一一年埼玉県春日部市に生まれる
 一九三四年東京帝国大学文学部英文科卒業
 一九五八年高崎経済大学教授
 一九六七年愛知県立大学外国語学部英米学
 科教授
 一九七七年以来名古屋短期大学英語科教授

ヘンリ・ミラー著
 ロレンスの世界——熱烈な評価——

昭和五十七年九月二十日第一刷発行©

訳者 大谷正義

発行所 株式会社北星堂書店

代表者 中土順平

一〇一 東京都千代田区神田錦町三ノ十二

電話東京(03)二九四一三三〇(代)
 振替口座 東京八一六〇二四

印刷・製本 株式会社 K・M・S

東京都千代田区三崎町二ノ二ノ五

※落丁・乱丁本はお取替致します。

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律
 で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となり
 ますので、その場合には予め小社の承諾を得て下さい。

目次

序論	3
第一章 個性	29
第二章 土壌と氣候	78
第三章 死の宇宙	124
第四章 復活	177
第五章 宿命	219
第六章 神聖な肉体	263
第七章 哲学	304
第八章 形と象徴	348
注	397
訳者あとがき	415

巻末
左開
(397
~
414)

THE WORLD OF LAWRENCE

A Passionate Appreciation

HENRY MILLER

Edited with an Introduction and Notes
by
Evelyn J. Hinz and John J. Teunissen


CAPRA PRESS
Santa Barbara
1980

序 論

『ロレンスの世界』の出版に伴い、ヘンリ・ミラーの文筆生活はぐるりと一巡して、出発点に戻るといえよう。というのは、もし事情が計画通りにうまくいっていたら、この作品は彼の最後の大作ではなくて、最初の大著となっていただろうからである。

『ロレンスの世界』の発端は一九三二年のパリにさかのぼる。この年、少し前に『北回歸線』の出版に同意したオベリスク出版社のジャック・カーヘインがミラーに、もし、ミラーがこのようなショッキングな小説の出版に先立って、ロレンスか、あるいはジョイスの短い批評的研究の著者として文壇に乗り出したら、時宜に適してはいないか、と示唆した。これら二人の確立した作家と結び付けて考えられ、また批評家として知られることは、まじめな思想家としての地位、ロレンスとジョイスが検閲官を切り抜けるのを助けたような名声を、彼に与えるであろう。その上に、カーヘインが見たところでは、ミラーの考えに対するロレンスの影響は非常に明らかであつたから、ミラーがロレンスに関して書くことは少くとも道理にかなつていた。

当然予期された通り、ミラーの反応は複雑であつた。ミラー自身の文学の成長の中で、ロレンスが重要であることは事実であつた。のみならず、ロレンスはミラーの個人生活の中にもしみ込んでいた。一九二〇年代初期、ニューヨークではロレンスが、ミラーとその良き友イーミル・シュネロ

ックとの間の対話の主題であつた。二十年代中期に妻のジューンの『同性愛』事件の中で、グドールン対アーシュラの関係が大げさに表現されるのを見た。一九三一年四月パリで彼はウォルター・ロウエンフェルズ（訳注IIウォルター・ロウエンフェルズ（一八九七—）。アメリカの詩人。第一次世界大戦後パリに住んでいたが、死後、約六巻の小詩集を出版した。一九三四年にヨーロッパと詩を捨てて合衆国に帰って、記者になった。マッカシー旋風で逮捕されたあと、一九五五年、詩人にもどり、『アメリカの声』（一九五九、『平和の歌』（一九五九）、二、三の死—一九二九年から一九六四年までの選詩）（一九六四、『ロウズベリーの国』（一九六五）などを出版した）に会つたが、ロウエンフェルズは当時D・H・ロレンスに寄せる挽歌と取組んでいた。これよりもっと最近、しかもこれは恐らくもっと重要なことであるが、ミラーはそのときまでには彼の詩神、腹心の友、パトロンのなつていた女性のアネイイス・ニン（訳注II一九一四—）。アメリカの女流小説家。一九三二年パリで出版された彼女の著書『D・H・ロレンス—素人の研究』は、いかにも女性らしい細やかな感受性をそなえて、ロレンスの世界を内側から解明している）と会つていたが、これは二人が互いにロレンスに興味を抱いていたためであつた。

なおその上に、ニンの『D・H・ロレンス—素人の研究』が丁度出版されたばかりだったので、そのニンとの対話に刺激されたことと、またメイバル・ドッジ・ルーバーン（訳注II一八七九—一九六二。アメリカの芸術後援者・回顧録筆者。三九）の『タウスのロレンゾウ』に憤慨せられたことがあつたことがダブつて、ミラー自身はすでにロレンスに関して何かを書く決意を固めていた。また彼はこれを短い、あるいは実体のない作品であるとして心に思い描いていたわけでもなかった。一九三二年四月、彼はニン宛に手紙を送つた、『ロレンスの問題に関しては、僕はそれに手を出すのがこわいといつてもよいくらいです。僕がこわいとまでいいがっているのは、ロレンスの問題が余りにも長すぎて、どんな雑誌、あるいは新聞にも向かないだろうからなんです。』

それ故、事情が別だったらミラーもカーヘインの示唆を、喜んで受け入れたらうことは疑いの

余地がない。だが、実際のところは、彼はカーヘインの示唆に抵抗を感じたのである。それは一つにはカーヘインの考え方には、打算的で非論理的な見方があったためである。この見方にはもう一つ、カーヘインが、そのような計略を必要と考えた理由と関連のある要素があった。つまり、ミラーが独り立ちするに足るだけの声価を得ていなかったということである。しかも、この要素の大部分が、ミラーが彼自身と実質上同年の二人の作家から、文学者としての名声を借り受けることを要求されていた、という事実と関連があった。カーヘインと会っている間に、『北回帰線』は「世紀の本」、堂々たる、圧倒的な（物凄い、等等々々）もので、これと比べれば『チャタレー卿夫人』と『ユリシーズ』はレモネードだ（原文のまま）。と評された、と明らかに自負心をもって、ニンに書き送ったことがある。事前宣伝としてロレンスとジョイスを書いたら彼はお供の立場に立たされたろう。彼はまたニンに、カーヘインが「ジョイスとロレンスは、こつそりひっくり返された」ところが多少あったが、いまやそれを大胆にやるべき時機が到来した、など、といったことがある、と説明したこともある。だが、もしこれが事実だとしたら何故「仮とじ本」が必要なのか？

こういうわけで、彼は計画を実行することに同意したが、帰国するや否や猛烈に怒って、カーヘインを攻撃する三ページの手紙をきちんと書いた。この「極度の興奮」の中で彼はまた『北回帰線』に一章を書き足すことを決意したが、これは「模倣的」でなしに、『ユリシーズ』の最後の一章に匹敵、もしくは凌駕するであろう。カーヘインの示唆に対する（彼の）敵意から生まれた、いわれのない一章である。だが、彼はまた突然、例の仮とじ本を激しく書き始めもした。そのため、二日後にカーヘインが彼に、もし『北回帰線』の初版が、「私家版」になるとしたら、仮とじ本は必

要でなくなるだろう、と知らせて来るとミラーは、いまではそれは僕の問題なのだから、何としてもそれを続けるつもりだ、と断言した。

いまではそれが彼の問題であるというのは、カーヘインが意図しているような簡単な宣伝用のパンフレットの観点からはミラーは考えてはいなかった、という意味においてであつた。もっと正確に言えば、この作品は、ジョイスとロレンスを追放するのに役立つ、ジョイスとロレンスに対する大規模の対決となるはずであつた。僕は貴方が（貴方のロレンス研究から）省略した、しかもいいたいと願つていたあらゆることをいいたい。この二人に関する僕の考えを徹底的に検討して、二人とは今後永久に縁を切りたい。どんなに沢山書いてもかまわない。と、彼はニンに書き送つた。彼はまたこの二人の同時代人だけに限定するつもりもなかった。かつていったように、僕はこの夢魔——昔僕を抑圧したすべての影響力、神々、著作、偉大な名前などをきっぱり厄介払いしたい。一つの非常に困難な努力によって自分を自由の身にし、そうすることによって僕がもっている創意豊かな著作に、最もすぐれた相対物を与えてやりたい。もし彼らがそうしたら、小説の中の主情主義、あるいは表現形式の不足などを嘲笑させなさい。そうすれば彼らに、食い込むべき食べたえのある一片の肉を与えてやることになるだろう——僕は彼らに開口障害を与えることになると思ふ。

彼の野心の広さだけが匹敵する精力と、彼に、何でも手もとにある仕事に寄与しないものを無視させる熱中振りで、ミラーは広範で意欲的な企画に従事し始めた。一九三二年十一月、賞賛と憤懣と理解の入りまじつた気持でニンはその『日記』に、ヘンリは彼の仕事に没頭して来た。六月中

は余暇をもたない。わたしは退いて自分の仕事に従事した。ヘンリがわたしに電話をかけて来る。

彼の作品の大部分をわたしに郵送してよこすので、わたしは彼の考え方に従おうとするが、彼は何というとしてつもなく大きな弧を描いていることだろう。D・H・ロレンス、ジョイス、エイリー・

フォール（訳注Ⅱ一八七三—一九三七。フランスの美術批評家、随筆家。著書「芸術史」五巻、一九〇九—一九三〇）、ドストエーフスキイ、文芸批評、裸体主義、彼

の信条、彼の心構え、マイケル・フレンケル（訳注Ⅱ一八七〇—一九三〇。「ヴェルテルの弟」の著者。この著書のキアラフ

裕福な退職アメリカ人実業家で、彼とミラーがロウエンフェ、カイザリング（訳注Ⅱグラフ・フォン・ヘルマン・カイザリング。一八八〇

ルズを介して会ったころ、彼は文学と哲学に専念していた。彼はパリ在住の

族生まれ。革命後ドイツに亡命、来日したこともある。チェイン・パレンの影響を受け、シュペンゲラーのように哲学を生活術へ転換せよとした。

またヨーロップの合理主義を不満として、東洋の人生観を好んだ。彼は自分の理想を実現するために、タルムジュータットに「知恵の学校」を創立

し、主に上流階級に信奉者を得た。またシェーラーやフロベニウスとともに人間学を研

究する「人間と土地」を編集した。著書に「哲学者の旅日記」（一九一九）などがある）。彼は己れを思想家と主張する。己れのまじめさを主張する。彼は単なる性交画家、しかも実験家、革命家とみなされていることにう

んざりしている。と書き留めた。

彼が、一度に四方八方考え抜くことには問題があるかも知れないということは、最初ミラーに

は関係なかった。寧ろ彼はそれをよい徴候と見ていた。すべてのことが繋がりをもっているよう

に思えます。それは僕が百弁花（原文のまま）か何かだという意味です。また、著作構成のため

に彼が案出した原案も、そのような思想選択の自由を当てがうことのできる大ざっぱな四部構造で

あった。即ち、これらの四つの部分、序文を含めると五つの部分でもって僕は気前よく大まかに

書くことができます。と、彼はニンに説明した。これらのぞんざいな部分の中には重複が起こる

かも知れません。だが僕がやって行くうちにそれは自ら解決すると思えます。しかも、彼の考え

が原案の範囲を越えて拡大したとき、彼は簡単にもう一つ別の案を案出した。例の仮とじ本は拡

大し続けます―僕は新しいプランを作成中です―十個の主要な部分からなる一種の計画案を。その計画案を物凄くがっしりつかんでおり、また計画案も深遠なものになります。

それ故、仮とじ本はすぐに、全くの注釈の屠殺場^{スラウター}になりつつあったけれども、ミラーは勇気を挫かれないで、元気に満ち溢れた。これらの注釈を書いた書き物全部が脳髓を書いた書き物に似ています。僕は場合によつては気が狂いかねないでしょう。けれども僕は至つて気は確かなんです。僕は先覚者のような気がします。それどころか更に予言者では？ 天罰。直観的な論理の一貫性の点で彼の筆致がたとえどんなものを欠いていても、その筆致が、大宇宙的関連^{グロウバル・コネクション}においてその埋め合わせをした。後日編集し、順序よく整理する時機がやってくるだろう。差し当つては彼の考えを紙に書き止めることが絶対的必要事であった。注釈が僕の身のまわりに雑草のように山積します。僕が大いに同じことを繰り返していることは弁えています、もう自分の言葉を思い出すことができないので、思考力を失うことを恐れています。

この緊張の時期を漠然と語ることが二年間続くうちに、一九三三年五月、その焦点が劇的な変化を示した。十一月から五月までは、種々雑多な考え方や、ミラーがかかわり合いをもつ作家たちの混乱の中に、ロレンスが、ジョイスと同じように、ある程度飲み込まれてしまうようになったのに反して、五月以降はロレンスが舞台の中心を占めることとなった。こうしたことが起こつたのはロレンスに対するミラーの姿勢も深刻な変化を受けたためである。

われわれがいままで見て来た通り、ロレンスとジョイスに関して書いてはどうかというカーヘインの示唆にミラーが同意したのは、挑戦気分でそうしたのであって、彼の最初の目的は、ロレンス

とジョイスの出しやばりの鼻を挫くことであった。一九三三年三月中はこれが彼の目的であることに变りはなかった。リチャード・因みに、ミラーをアネイイス・ニンに紹介した人物―宛の手紙の中でミラーは、彼が「ジョイスの頭からたわごとを叩き出してゐる」と説明した。しかも、ロレンスがジョイスに示した著しい相違の故に、近くは一九三三年三月二十九日、彼はいささかロレンスの真価を知るようになっていたけれども、ロレンスに対する彼の関心は、やはり、主として、ロレンスをさつさと片付けてしまうことであった。彼はニンに書き送った。「僕はロレンスに関するものをもっともっと欲しい、マリの著書とコリン（訳注リこの人物に関し訳者不詳。一九六九年出版の『破滅の川―D・H・ロレンスの批評の伝承―虹と恋する女たち―の編著をもつクランク・コリンが）の著書とメイバル・ドツジ・ルー・ハーンの著書すら、もし貴方がそれをおもちでしたら欲しいです。せつせとやっている間に、できる限りあらゆる角度から彼と取っ組むつもりです―できる限りすべての事実と解釈が欲しいです。僕は生涯二度と再び彼には触れることはないかも知れません。きれいさっぱり彼を洗い落さなければなりません。」

それにもかかわらず、一九三三年五月七日に彼は己れの誤りを告白するために書き送った。「僕はロレンスに関して、不親切で不当な意見をいったことがあると思います。彼は僕がかつて夢想していたよりも遙かに偉大です：彼は岩のように傑出しています。彼は彼の時機を待ちます。僕はこの研究を始めたころはロレンスに関しては実質的には無知でした。いまは彼の真価を心から認めます：自分を卑下しており、懲らしめられた感じ です。しかし、僕は今までよりもっと現代的感覚をもっています。何がこの大きな変化を引き起こしたのかというそれは、ミラーが懇請した他の本の代りに、もしくは他の本に加えて、ニンが彼に『山荒しの死』（訳注リ一九二五年十二月出版。正しくは『山荒しの死』についての考察その

か）という題名のロレンスの短い随筆集を送ってやったことであつた。

この随筆集、また特に「王冠」（訳注リJ・M・マリが發行していた雑誌「シゲニチア」に寄せた随筆）に関する随筆が何故ミラーにそれほど物凄い衝撃を与えたか、ということを理解するにはわれわれはこのときまで、ロレンスに関する彼の知識が大部分、ロレンスの主要な小説と、また聞きに限られていたということに留意しなければならぬ。その結果、仮とじ本を書き始めた当時のロレンスに関する彼の印象は、ちび、いやなやつ、情味の乏しい徹底的なイギリス人タイプ。僕は物に対する彼の労働者の（いや、ブルジョア的な、だった）態度―床をぐしぐし洗い、食物を調理し、洗濯するなどがひどく嫌いだ。それに彼の比類のないがらくた振り！ 感受性が強いのではなくて臆病なのであり、胆力に欠け、人間性に欠けているのです。という印象であつた。同じく、ロレンスが書いた吐き気を催させるような手紙をよくご覧なさい。と、彼は一九三二年四月にニンに所見を述べた―メイバル・ドッジ・ルーハーンの著書に発表されている手紙に触れて。彼は一体どうしてあんな女の毒手にかかったのかしら？ 彼には何かひ弱いところがあつたのです―すてきな文体の持主であるにもかかわらず。以上と対照してみると、「王冠」の中に彼は一人の男、深遠な思想家、夢想家を見出したのである。文体は比類がない―聖書の中の最もよいものを思い出させます。僕の意見では、思想はイエスの格言の中のどれよりもすぐれています。新しい黙示録のようです。シュペングラーに基礎をおいています。：しかもシュペングラーよりもまさっています：ロレンスの全著作の種子はこの点にあります―しかも十分根柢のある種子以上のものが。それは神秘家が最も神秘的な状態におかれているときの神秘性です。僕はそれが大好きです。

「王冠」は、要するに、ミラーが過去八か月の間、系統的に述べようと悪戦苦闘してきた宣言と信条告白のようなものであった。従つて、彼は一方では自分がそれをもつと早めに見なかつたことを悔んだ。もつと早めに見ていたなら僕は多くの手間が省けたかも知れません。その反面、切り抜けてこれに達して、彼が示すすべての謎に対する解答が、最もすばらしく取り扱われているのを見出すことは恐しくよいことでした。しかしながら、恐らく、ミラーのロレンスとの和解を最もよく示すものは、「王冠」を書いたころロレンスが比較的若かつたことを彼がとやかく批評することができることである。僕はあれがあんな若い——三十歳——のころ書かれたことには、ほんとにびっくりしています！」

彼がこのときこれからロレンスを主たる関心事にしようとしていたこと、また彼がロレンスを世の中の非難の的にするよりは寧ろ、これから解明しようとしていたことは、ミラーが考えたところでは、それまで数か月間に書いてきたものを全部反故にすることを必要としなかつた。というのは、いまやミラーはロレンスを正しく理解したのであるから、ロレンスはミラーが自力で発展させてきた考え方の多くを具体化したものであったからである。それ故、彼の新しい考え方を書き尽くすのに費したのと殆ど同じ時間を、一つの考え方の改訂、あるいは拡張に関する欄外の指示を書いたり、どこに章、節の記号を挿入すべきかを決めたりして、それまでに書いたものを読み返すのに、費した。この点で彼を助けていたのはアネイイス・ニンであったが、彼女がこの仕事に捧げた時間と努力は、タイプで打った原稿の中で見出すことのできる、彼女の筆跡になる極めて多数のメモからして明らかである。

ミラーの新しい焦点は、カーヘインが、ある意味で、ロレンスに、関する本をこれから手に入れようとしていることを意味したが、これはまた、彼がこれから待機しなければならなくなることを意味することでもあった。ミラーにカーヘインのところへ行く道を教えた代理人のウィリアム・ブラッドリ宛の手紙の中で、ミラーは自分の立場を手短かに述べている。彼の言葉は余りにも読む人を感動させるので、分かり易くいかなることができないし、内容が余りにも感情や信念などを明かにしすぎているので、要約できない。

一九三三年五月三十日

ブラッドリ様

二週間が過ぎ去り、貴方のお手紙が返事のないままになっていることを、小生も急に実感しております。小生はロレンスに関する著作を貴方にたたいまお見せすることについては考えを変えます。不完全な、ひどく荒削りの、大変めちやくちな有様のまま、いまそれを貴方にお見せして何のお役に立ちましようか？ 貴方は、お職業柄、とても多くのたわごとを余儀なくお読みにならなければなりません。急を要しなくて宜しいことなのです。いいかえれば、もしお待ち頂くことができません、小生はお待ちして構いません。小生はめったに事を急ぐことは致しません。あれが完全に仕上って、申し分ない（？）ものになるまで差し控えたいと申し上げるつもりはございませんが、まだそのようなものになっていないことは確かです。と申しますのは、小生は自分の意見を絶えず変えております。いや寧ろ自分の見解を絶えず深めております。もしも見解を深めるというようなことがあると致しましたら。

貴方に明確に理解して頂かなければならないことは、小生がこのロレンスという悪魔に、大変多くの時間を当てて参りました、ということなのです——通りすがりに彼を片付けようと思ったので最初はいやいやなが

ら、次には喜んで、そしていまでは、彼の天才に対して最も充実した歓喜と賞賛を捧げながら。もし小生が最初の取り上げ方（大抵全部が、攻撃でした）をあくまでやり通してしましたら、面白い刺激的な本を出版していたことでしょう。ですけれども実際のところは、小生の本は、完了すれば、その種類のすべてのものプラス何かそれ以上のもの、となることを小生は心から信じております。真剣な目的をもっている（これを容認して下さるでしょうね！）小生自身のような男は、このロレンスの問題でそんなに長いことぐずぐずするには、正当な理由を見出していなければならないのです。その正当な理由というのが、じっくり考えるようロレンスが小生に与えてくれたものであり、それが、小生が本の中に滲透させたいと願っていることなのです。本に秩序—秩序、表現—これが小生には最も困難なのです—を与える多種多様な方法に関して、いままでも小生は動揺してきたのです。しかも小生は忠告も、援助も欲しません—生まれ付き。小生がこれを口にするのは恐らく、小生にとって表現形式が非常に甚だ重要であるということを、非常に深刻に実感しているためかも知れません。しかし、表現形式は小生の表現形式でなければならず、まぬけものが表現形式と考えるものであってはいけません。

表現形式に関して、以上のことをお読みになると、恐らく貴兄はちよつと微笑なさるでしょう。どなたか、小生が表現形式に関心をもっていると思像なさる方がおありでしょうか？ まあ、おありではないでしょう。しかし、そうなのです。ゲーテの表現形式から：ニーチェの表現形式から疑問を起す能力が生まれる。と、「西洋の没落」の序文の中で、シュペングラーはいいました。しかもフランス人にとっては、彼らが「表現形式」と考えるものが、シュペングラーの傑作の中には恐らく極く少ししかないでしょう。しかしながら、どんな立派な芸術家、表現形式に関する普通の考察を越えたどんな人にとっても、この破壊の哲学の着想と出来ばえの中には何か途方もなく本質的なものがあります。しかも恐らく、—これらの着想と出